

日展ニュース

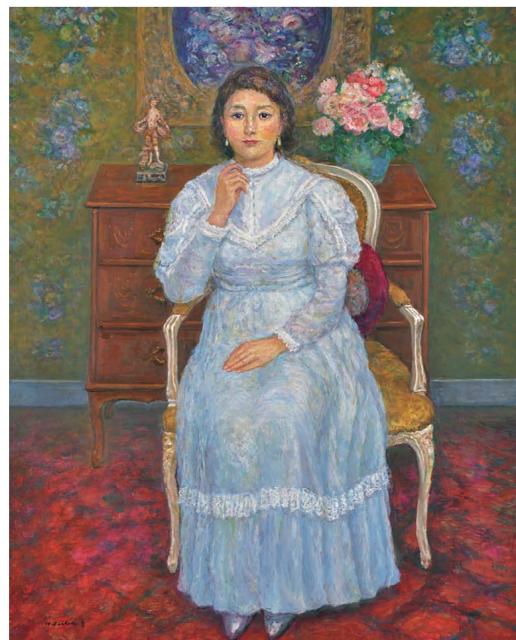
No. 174

<http://www.nitten.or.jp/>

令和2年1月30日発行

編集兼発行人 土屋 禮一

特集 改組新第6回日展



改組新 第六回日展を迎えて

公益社団法人 日展

理事長 奥 田 小由女

令和元年 改組新 第六回日展を明るく元気に開催致します。

新しい令和の時代に生まれ変わった“新生日展”的気持ちで、更に若々しい夢のある日展として発展し繋ぎ続けるよう努力し、我が国の文化芸術の振興発展に寄与して参ります。

また、今日まで日展を応援し支えて下さった多くの皆様と、日展が苦難の折も耐えて精一杯の作品を制作し出品し続けて下さった日展作家の皆様に心から感謝と御礼を申し上げます。

来年の二〇二〇年は、オリンピック、パラリンピックの年であり日展作家も日本博に参加致し、多くの外国の方々に日本の文化芸術を御紹介する事となります。日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書と五科揃つた日本一大きい芸術家の集団を力強く世界に発信して参ります。

今後とも皆様の応援、御支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

(令和元年十一月)



改組新 第6回日展 右から宮田文化庁長官、奥田理事長、逢坂国立新美術館長によるテープカット

改組新
一〇一九年
第六回

田展受賞者一覧

書	日本画	日本画	日本画	日本画	日本画	日本画	日本画
工芸美術	彫刻	洋画	彫刻	洋画	彫刻	洋画	彫刻
書	日本画	日本画	日本画	日本画	日本画	日本画	日本画
東京都知事賞	東京都知事賞	東京都知事賞	東京都知事賞	東京都知事賞	東京都知事賞	東京都知事賞	東京都知事賞
日展会員賞	日展会員賞	日展会員賞	日展会員賞	日展会員賞	日展会員賞	日展会員賞	日展会員賞
ほのやみ	粟国島の民家	おい	港の朝・曇る日	海	岑積瀬清追	日參	詩夏新憶
ほのやみ	さあやかな一日の終わりに	ああらし	あおあらし	想	日惜	夏	新憶
ほのやみ	風と光と水と	メタマリーライト	Mesa Matley「神光天地照」 Light of a god lights up a universe				

田村中平諸	吉川大樋	中村長谷川	牛井勝斎	山下
中田原野星	斎藤	中村	窪	藤下
徹好篤行美	尤		慶	眞秀
夫謙徳雄喜	美恵子	鶴	十人	保言夫子

踊るサテュロスの夢	無辜の豊	立ち人	野菜	風に人	第三科《彫刻》	第二科《洋画》	第一科《日本画》	特選
チ	の	く	く	ぐ	歩	沈黙の地	共に歩む。	
の	の	の	の	の	北の踏切	陽のあたる階段	ふるさと	

高坂神大伊	柳松中遠	高佐鷺茅	飯阿	三平野土竹城工北大鶴
砂本山龟藤	澤本居	山田渡	野塚部	谷野原岐内野藤川矢飼
晴美清奏	利貴正	厚啓一	悦吉康良	佳美都久馬佳恵奈英子
光健里壽太	光子	記史介	清太郎	典加由希恵彩

王張名安墨蛇四	霧山中	流耀	瞬景	第四科《工芸美術》	対報恩感謝
漁洋籍	嵯峨山莊色紙和歌集	象	生「觀」	夜明け讃歌R-1	ひとりズ
詩詩	化爲	宙	「何處へ」	Waterfall	の月

山宮深萩西奈中	森舟福	西鶴立	武石	長谷寺
口負瀬野村良室	越富本	見松	佐々木	園澤
啓丁裕展大衡舟博	克一	功	藤田	本
山香之山輔齋水子雪雨	徳生	眞文	満	将倫孝

座談会

「令和に望む」

出席者

奥田 小由女

理事長

日本画 審査主任

福田 千惠

洋画 審査主任

中山 忠彦

工芸美術 審査主任

山本 真輔

彫刻 審査主任

武腰 敏昭

書 審査主任

中村 伸夫
(日展ニュース委員)

令和元年11月15日 (金)
於 国立新美術館 地下一階
審査室D



司会

奥田 小由女

集まりいただきまして、誠にありがとうございました。司会を担当いたしました五科の中村でございます。よろしくお願ひいたします。

今回のテーマは、「令和に望む」ということで、新しい時代に、自律的に、積極的に、どういうふうに希望を持つて日展をよくしていくか、というテーマで座談会を進めたいと思います。

はじめに、今回の改組新第六回日展の鑑査・審査の状況、作品の傾向、あるいは今後に期待できる事柄等、一科から順番にお話を頂く予定ですが、全体を通して、奥田理事長から、今回の日展の現況に関するご感想、または将来への展望のお話を頂きたいと思います。

今回展の審査全般について

理事長 今回の日展は、新しい

時代、令和の時代初めての日展でございますので、新生日展のような形で第六回展は開きたいということを、最初から意識しております。

ですから、オープニングパーティの時も、受賞者の皆さんを一堂にお披露目をして、若い人がどんどん活躍できる日展になるよ

うにという意気込みで、準備を重ねて参りました。新しい時代を迎えた日展というイメージで、その点を一番心に置いて始まった日展でございます。

いい作品だつたら必ず推奨できるのだという確信を持ってましたと、どの科の審査員の方もそんなふうにおっしゃっていました。

ですから、とても充実した日展を開会することができたよう思つております。

司会 第一科の福田千恵先生から、それぞれの科の今回の審査や作品の傾向、あるいは今後に向けの期待等がございましたら、お願いいたします。

福田 今年は、その一番大事な制作の時期に台風がございました。これは一つの例なのですが、これも、昼はボランティアと後片付け



をし、夜は制作に励んでいました
という話を聞いております。

審査に関しましては、今回、外
部審査員を抜きますと、八〇代が
一名、七〇代が二名、六〇代が五
名、五〇代が四名、四〇代が四名
という感じで、年代層もかなり広
範囲になつて審査いたしました。
それぞれの年代から来る作品の見
方もありますし、美意識というも
のは個人のものだと思うのですけ
れども、そういうのもかみ合つて、
大変いい審査ができたのではない
かと思つております。



開会後の文化庁長官

それともう一つ、今年は五名の
女性の審査員が出ていました。こ
こ数年、増える傾向にあります。

これは無理やり女性だから選んだ
というのではなく、ここ数年、い
い仕事をしているということで、
女性たちも、今、審査をする立場
に入つてきたということを、自分
も女性なので、うれしく感じてお
ります。

司会 第二科の中山忠彦先生、
お願ひいたします。

中山 私は、この審査をやる前

になるのですが、その時に申し上
げたのは、審査主任というのは票
を数える役目ではない。審査主任
の美意識というか、日展に対する
考え方の基本的なことから審査を
する。それによって票数どおりの
結果が出ない場合があるというこ
とをあらかじめ納得して頂いた上
で、審査を始めました。審査員の
皆さん方が非常に協力をしてくれ
まして、私の経験では、今までに
ない審査ができたと確信しております。

これは陳列や何かの場にも及ん
でおりまして、今年の陳列の状態
というのは、非常に見やすいとい
う評判を頂いて、私も大変よかつ
たと思っております。

いいたします。

山本 今年の大きな変化として
は、彫刻は審査日程が二日になり
ました。日程についてはちょっと
タイトかなという、そういう感じ
でございました。

審査の前に皆さんに申し上げた
のは、審査あるいは方針といった
ようなのですが、審査員が、外
部審査員、それから中に審査主任、
会員の審査員、新審査員といまし
て、おのおのの感覚の違い、経験
の違い、いろいろあるけれども、
自分が置かれた立場をみんな意識
しよう、これが一つ。

もう一つは、今年は令和の第一
回目という考え方で、今日からが
スタートだ。今の時代を生きてい
る、今の空気を吸っている人たち
がどんな仕事をしているかということ
をよく見よう、そういうこと

を大まかな方針として、審査をい
たしました。

非常に新鮮な作品がありました。
福島等の罹災者の作品も入選ある
いは特選に選ばれております。い

まだ家の泥をかき出しながら生
活しているのだというようなこと
を、この間報告を受けましたが、
そんなふうで、非常に多岐に渡っ
ているというふうに思つております。

それから、次回展に向けてです

が、去年の審査員達がどうやつた
かというのはデータが残つている
のですが、余り参考にならないの
ですね。新しく自分たちで、今年は
これでいいこうということで、皆さ
んで意見を出し合つて進めてまい
りました。だから、逆に言えば、
次年の年はこういう審査をしてほし
いというような伝達は、今年から
私は要らないと思つています。そ
の時の審査員の役割で十分だと思
います。

あと、内容ですが、言葉で言い

ますと、「さわやかな風が会場に
吹いているね」というふうに言つ
てくださつた人がいます。これま
での日展の中にはないような作品
が幾つも見られました。今までの
展覧会にはなかつた表現が出てき
ております。

山本 眞輔



5 ————— 日展ニュース ————— 第174号

工芸美術会場



ざいます中から、各部門に分かれ、陶器なら陶器、漆なら漆といろいろな種別の最も良い作品を審査員が選んで頂いて、それを皆さんでまた決めて頂くという方法をとつてまいりました。

今はいい作品が出てくれるという、そういう時代になってきたのは、大変い

いことだと思います。常に言うの

ですけれども、次の年代に向かって、自分が生きている証みたいな

ものを絶対に作品に生かしてください

さい。昔の江戸時代の文化みたいなものを引きずつていては、どちらかというと、昔のものにひげを

つけたようなものは余りおもしろくないということで、ぜひ今生き

ている証を後世へ残していくほ

しい。そうでないと、昭和、平成、

令和という時代が見えてこない。

そういうことを常に僕は申し上げ

てきました。

司会 第四科の武腰先生、お願
いいたします。

武腰 工芸というのは、ご存じのとおり、ものすごく生活と密着したものなのですけれども、いわば生活空間の中でその姿が徐々に変わってくるのが工芸だと思いま

す。そういう中で、作品を何十点か並べるのですけれども、まず最高にいい技術を見てもらおう。近寄つて技術を見てもらい、離れてその感性を見てもらう。その二つがないと、やっぱりいい作品ではないと僕は思っているので、常に特選は、いろいろ種別がござります。

司会 第五科の黒田先生、お願
いします。

黒田 書の場合は、審査日数が、

工芸美術会場

本当に長丁場で、その九日間のうち、今回は特に台風がありまして、丸一日、空白的になってしまったと

いう…、審査員にとりましては、非常に焦るようなこともあったの

ですけれども、その中で、基本的には絶対によい作品を見逃すまい

ということで、審査に臨んで頂きました。

今年は、一三九点という出品増があつて、全部で八六八二点となりました。書にとっては、それだけ日展を目指そうという人が全国に多くいるのだということで、本当にありがたいなと思っております。

その中で、壁面というのは限られていますので、陳列する点数がこれ以上増やせません。何とか増えた分、陳列ケースを少し増やして、二五点の入選増を図つたのですが、いずれにしても一二%強という厳しい入選率となりました。

それだけその中で入選できるということは、日展を目指す者にとって、ほかはある程度人の流れに沿つて早く流れてしまうというのが多かったのですが、今年の状況を

見てみると、どの部屋にも人がゆつたりと歩いて、ゆつくり鑑賞して頂いているような雰囲気がありましたので、展示の面でもすごくバラエティー豊かにできたのではないか、そういうふうに思つて

おります。

作品的には、すごく洗練されたものが多くありますし、大体そういう作品は誰が見てもいいというふうに思うのですけれども、その主催の先生方にお話を伺いましたが、厳格な審査、そして新人の

黒田 賢一



発掘、あるいは壁面の配置の工夫など、さまざまな点でそれぞれの科のご苦労話も含めてお伺いしました。

ここからは、自由なフリートークという形で、進めたいと思います。今挙がった事柄についてもつと強調されたいこと、あるいは、今後に向けてお話ししたいことがございましたら、お願いしたい



日本画会場

という意気込みが伝わってくるような、そういう雰囲気が各科にございました。

司会 例えば日本画ですと、す

ごくお若い方が特選で、かつての日展にはないような新人の抜擢みたいなことが少しずつ定着してきました感じがしておりますが、福田先

生、どうですか。

福田 日展の日本画は、とてもバラエティーに富んでいます。具象から、超リアリティーから、それこそ今の現代アートのような仕事まで、全ていいものであれば認めようじゃないかという解釈を持つています。いいものであれば、年齢に関係なく皆さん応援しているわけです。

中山 洋画の場合の第一室の考え方といいますのは、もう十年前か前、私が発案して、審査員と特選受賞者を向かい合わせで展示するというふうな形をとつて現在まで続いています。これは数は少ないのでですが、特選の作品よりも審査員のほうが劣るじゃないかといふ客観的な声が出るものがあつたり、どつちが審査員かという率直な質問があつたりする場合があるのです。これは非常にいい勉強になつていて、その向かい側の審査員の皆さん方

はおっしゃる。

山本 陳列方法も考えなければいけないと思いますけれども、ち

ょっと視点が違うのですが、私たち名前を見ないで審査していま

したので、特選二五歳というのがありますと、おつ、すごいなと後

で気づいて。これなら皆さんに、若い人たちが頑張っていますといふことをアピールできるなというふうなことは思つております。

武腰 四科では、特に壁面の場合ですと、近くではなかなかその人の感性は見にくいのです。技術は見えても。だから、中央にディスプレーがありますから、僕はいつも近くで見ずに反対側から見ているのですね。要するに、離れて見ています。ああ、この人、感性があるなとか、近寄つて見て、いや、仕事もきれいだなど。これは本物だと思って、いつも見ているのですよ。

ちょっと気になることがあります。私は日展の入場者数のカウントの仕方について問題があるのではないかと思いました。つまり、一科から五科まで、各科それぞれの入場者の数が具体的に結果として残るようなカウントの仕方を考えていただきたいということです。

司会 そうですね。それも重要

なことですね。

黒田先生、書の場合は、漢字、かな、調和体、篆刻と、さまざま

な領域があつて、先程は審査のご苦労をお話しましたが。

黒田 そうですね。本当に入落

の線上の作品をふるいにかけると

いうのは……。

限られた点数で、これ以上入選を増やすことができないというと

ころまでいっていますので、本當はもう五、六点取つてあげたけれども、その五、六点を落とさないといふと会場に入らないというような状態になりますから……。



オープニング・パーティ

つらいところかなと思います。何かそういう問題が解決できることが望んで嬉しいのですが、なかなか難しいですね。

山本 彫刻ではパリエーション

をつけるために、二つのグループに分けて、今年は一四〇センチま

で、今年はフリーというようなことでやっています。でも、陳列すると、今年は小さいとか、余りそういう感じはしないでしょう。だから、本当はそんな制限はないほうがいいとは思うのですが、今、彫刻はそうやっています。

司会 これまでには出てこなかつた問題の一つに、会期のことがあります。かつて日展の会期は六週間ありましたが、今は四週間になっていますよ。この会期を三分の二にしたことで、先生方の科で何か問題があるようでしたら、おっしゃって頂きたいと思います。

書の場合は、一番問題なのは、額は全部が見えますけれども、帖、巻物は、ケースがあつて、ケースの長さが一・八メートルですから、そこに三点入れないことには展示ができないということになります。

本来ならば四メートル以内の巻物、あるいは帖で出しなさいということになつていてから、出品して、たとえ入選したとしても、五分の一、六分の一しか広げてもらえない、というふうになるので、巻物の半分ぐらいは見せてあげたいと、いうのが我々の望みです。現状では五〇センチしか広げてあげられないというのが、本当に



合も、私は、結果を見なければわかりませんが、一、二週間少なくなつても、余り変わらないのではなかいか、私の意識ではそうですね。

(休憩)

司会 後半のテーマは、これら日の日展、特に令和という新しい時代に対応する新たな日展ということでお話をお願ひしたいと思います。

新しい時代に向けての 日展について

理事長 今、第六回展で、日展

も改革に入つてからかなり落ち着いてきて、順調に推移しているとと思うのですが、世の中もだんだん高齢化してきますし、日展自身も年齢も高くなっていますので、これから若い方に本当に活躍して頂かなければいけないわけで、次世

中山 私の経験では、余り会期が長いと、そのうちにそのうちに思つてゐるうちに、逆に見逃してしまることがよくあります。博物館などで、今も特別展をやつてますが、いつまでだなと、頭の中には日本画の人たちは減っていないのですが、いつまでだなと、頭の中一応入れるのですが……。いつまでに行かなければならぬい、ということになりますと、無理としても行きますので、日展の場



日展は非常に大きな団体ですが、それでも、やはり人を育てていく、作家を育てていくと、各科でそれをこれから大事にしていくと思います。才能のある人をどんどん日の当たるよう育てていって、健全な日展であり続けたかなかければいけないわけで、次世代に、令和の時代に、平成から令和につなげたということの思いが非常に大きいわけなのですけれども、それと同時に、若い方に令和の時代を受けとめてもらっていくということの重要性を感じています。

福田 十一月二日に日本画のシンポジウムがありまして、地方では日本画の人たちは減っていないのですね。むしろ東京で日本画を描く人が少なくなつてきています。金沢では家賃などの補助金を出してくれて、若い芸術家を育てている。京都でも、もちろん中心のと

彫刻会場



ころを作家が利用できないかなと
いう思いはしていたのですね。

これはちょっと昔の話になりま
すけれども、フランスのルイ一四
世が、外国の作家、国内の作家に

限らず、経済的な応援をして、自
由に作品をつくるせるという組織
をつくりました。それでフランス
の文化はあれほど立派なものにな
つていったのですね。それは国家

的あるいは王権力の問題ですから、
日本とは全く違う世界ですが、や
はり上に立つ人の考え方によつて
随分文化も変わつてくるとは思
います。

若い人たちへの日展としての支
えが何かできるのかどうか、これ
は難しいことだとは思います。

ところが、日展には、ご存じの
ように、洋画はたつた一〇〇号し
か出品ができないという制限があ
のですね。

若いたちはそういうのに敏感
ですからね。

司会 それでは、中山先生、お
願いいたします。

中山 今のお話で、私も思い出
しましたが、これは地方も含めて
東京の近辺でも廃屋が非常に多く
なっている、あるいは廃村のよう
な形になっている。そういうテレ
ビの映像を見ながら、こういうと



中山 忠彦

と思います。

それから、一般の人たちへのア
ピールという点ですけれども、日
展の日は一万人を超すのですか？

ただなら見てやろうというよう
な気持ちがそこにあらわれている。

そんなふうに受け取ると、フリーラ
ンスの日を増やせばいいやと簡単に思
うのですが、それは乱暴な意見で
しようか。

司会 これも大きな課題だと思
います。

山本先生、お願ひいたします。

山本先生、今の中山先生の問題、や
つぱり日展全体のこれから理事
会の問題ですね。単に審査に当た
つた者としての意見ということで、
ここだけで終わらせないで、理事
会までもう一回持ち上がりて頂か
ないといかんですね。先生がおつ
しゃつたこと、ものすごく大きな
問題だと思います。

私、彫刻なのですけれども、ボ
イントを三つ言います。

まず、彫刻は出品点数が少なく
なり、若い人へのアピールが非常
に重要だということです。日展に
出品することで仕事が得られるよ
うな形を模索しなければならない
と思います。

もう一つは、公益社団法人とし
ての役割をもう一度確認すべきだ



書会場

武腰 敏昭



に感性が素晴らしいと入選すると
いう人もいます。

理事長 ですから、日本画のほうは、二〇代とか、そういう方が特選になられたり、ああ、うらやましいなと思いますよ。工芸の場合ですと、やはり表現する力をマスターするまでにどうしても時間がかかるので、なかなか直接表現というのができない仕事なのです

想像がつきませんけれども、最近の子どもたちというのは、どちらかというと、芸術のほうが機械文明に押されているようで、スマホとかタブレットばかり見て、電車に乗っていますと、一〇人中、九人ぐらいは見ていていますわね。だから、そういう人たちをいかに文化化、いわば日展のほうに目を向けるさせるか、大変大事なことだと思います。高校生や大学生には、無料とはいきませんけれども、日展

武腰 若い人は生活がありますから、大学を出ても、即、お金になるほうへ行ってしまうのですね。こつちへ向けようとしても、なかなかね。

福田 実際の話、日本画の絵の表現方法が平面で描くものですからアーティストとか映像の世界へ副収入を得るために働きに行ってしまうって、本当は日本画を描きたいのだけれども、結局、そちらの作家になる。

やはり日本画も覚えるのに時間がかかりますからね。昔は胡粉をとくので一〇年と言われたもの。

工芸ですと、どうしても技術を覚えるのに五年、一〇年はかかります。大学生でたまに入選する人がいるけれども、中には技術的に余り進歩していなくて、変わったものをつくるということで、特

さらに日本には伝統的な墨の描き方とか、デッサンの方法とか、ありますので、そういうのを身につける必要があると思います。大学では教えていますが、独学で頑張つてくる人も応援しています。入選はなかなか難しいと思つて避けないでチャレンジしてほしいと思つています。

黒田 書も、同じようなことが言えるのですが、専門の大学を出ても、書の教師になる道というのが今の時代極めて少ない。一般の社会に就職すると、せつかくの才能が活かしにくいという状況が続いている。

書の場合、あの作家が好きだから、あんな作品の書ける作家になりたいと憧れや興味を持つことがあります。小さい時から目で見て楽しんで、ああ、何かやりたい、そういう興味が湧くことによつて、その道に進んでくれる人が増える。

今は小学校の三年生から習字があるのですが、一、二年生から何となく五科があるのです。その一つだけ、絵画とか彫刻、工芸とか書だけとかではなく五科が全部ある展覧会というものを見てほしいし、いろいろなところでやつてほしいと思つています。

福田 日本画では、助成金を出してくれるメセナを利用しない手はないのではないか、という若手

下村元文部科学大臣来館



福田 千恵



それから、巡回展に関しては、私自身の経験から、巡回展で私も恩師と知り合い、今日に至っています。この若い人は団体離れといいますか、そういうのになじまなくなつひとつも拡大してやつて頂きたい。予算の問題などがあるとは思いますが。

からのたくさんの話が出ています。今、美術館自体がメセナを利用して、会社がバックアップしているというのはよく聞く話なのです。

また、新聞社の協定によつて、団体展の批評は日刊紙には書かないという申し合わせをして、随分長いことになるのですが、もうそろそろ、そういうものからは解放してもらいたいと考えてはおりま

す。中山 この間、ある若い人気作家の作品を画廊に見に行つたのです。そうしましたら、会場に入れなくないくらい若者であふれかえつている。それで画家に、どうしてこんなに集まつたのと聞いたら、今、スマホとか、何かの情報があつて、全然知らない人なのですけれども、それを通じて見に来たと。彼が、自分の作品はこうこうこういうものだということをそれに出したのです。その結果がそういう状態になつてゐるわけです。新しい情報の伝達の手段というものをもつと日展も考えていいと思いま

す。司会 最後に、奥田先生、きょうの座談会のまとめのご発言をお願いしたいと思います。

理事長 とにかく、私たちは日

展に一生をかけているわけですが、今の若い人は団体離れといいますか、そういうのになじまなくなつてきているという風潮は確かにあります。ですが。

それともう一点、日展は偉大な先輩たちをたくさん持つてゐるわけですから、毎年というわけにはいかないでしようが、例えば日本画の中の三山を初め、日展の先輩方の作品を、小さい部屋でもいいから一室に集めて、我々自身もう忘れてゐる作家たちもいるわけですから、勉強のために、その先生方の作品を見せていただけないか。観客の中でも懐かしいと言つていただける方も多いと思いますから、そういう方法で先輩方の力をかりるのも、一つの方法だと考

えます。

司会 最後は、奥田先生、きょうの座談会のまとめのご発言をお願いしたいと思います。

若い人に、そういう喜びとい

うにしたらそれができるのかといふにかく頑張りましょうということを言つて、引きとめたりする方も幾人かござります。

じゃ、やめられて、自由な世界に戻つて、それ以上の作品ができるのかなと見ていると、やっぱり日展で頑張つて出した時のほうが絶対いいということになるのですね。

ですから、日展というのは、皆さんが一年を通して最大に頑張つて、しかも作品を残していつて、精いっぱいの仕事をしていらした歴史がずっと動いているわけですから、一番すごい、最高の場所だというのを皆さんがあつと理解して、その喜びを若い人たちに与え続けていけばいいなと思います



司会 中村 伸夫

(おわり)

國らずも日展のご指名を受けて

(第一科日本画 外部審査員) 原 田 平 作

予想通り初めに入落選の鑑査があり、続いて特選の選定があつたわけであるが、それらは三日間かけて行われた。数が多いからそうなるのであろうが、経験上県展や市展などでは一日か二日で終わるところを、ゆっくりと丁寧に鑑査が行われた。これが今度の審査に参加させていただいてまず第一に感じたことである。

思えばこうしたことが、一作一作の技法というか描写力が一定の水準を超えているという日展の一つの特色を、支えているものなのだと思うが、それは文展、帝展、日展という官展から育つてきた伝統というものなのであろう。今まで出来上がった展覧会を見て、日展日本画は表現力には問題のない作品の陳列会だとみてきたが、こうして中に入つてみて実感した。これは院展の着想、創画会の調子と比較して学び実感してきたことと、変わりはなかつたということになる。

それから次に第二の感想として、作家の集団としてその特性のような点はどうのうに発揮されてゆくのであろうかと、関心をもつて当たつてみたが、それは選考の方法を指導者がまず提案し、それを軸に審査員が意見を述べて調整し実行するという方法で行われていたことをあげてみたいと思う。これは憚りながらすることによって、作家の集団としての一定の特色が発揮されるのだと思われ、なるほどと思った。

原田平作 (はらだ へいさく)

一九三三年東京都

生まれ。



県展や市展などでは公平性と言つてゐるうちに、時には何か合点の行かない場合も表ずるからである。そのほかいざれにしても良い経験をさせていたいた。入選した作品、そして特選に選ばれ受賞した作家の方々に栄光あれと改めて申しあげたい。

現在、大阪大学名誉教授、一般財團法人県美術館長・名譽館長。きょうと視覚文化振興財團理事長。

(第二科洋画 外部審査員) 瀧 悅 三

第一審で、一、六七七点を鑑査する。過去数々の鑑査を経験している私だが、日展は初めてで、これほど多くを見るのもまた初めてだ。どうこなすのか、関心を持つて、成り行きを見守つたが、確かな慣行、もしくは経験則に従つて、なるほど、そのため巧くスムーズに進行しているのか、と得心した事だ。

入否は、挙手による。当方、手上げるか、下げたままかで、作品は、入るが、外れるがあり、明暗分かれる。結果がどうあれ、当方、どれも確り見た。それも二日掛り、精神の緊迫の二日の持続、大した事のようを感じる。

その間、わずか数点だが、どこの誰のものか判り、通つたのには悦び、不首尾には哀れを覚えても、欠陥ある故仕方ないと、冷たく構えていた。外部の者の気楽さのせいである。だが内部審査員はそうはいくまい。無所属は別として、自分の所属する団体の者の作品は誰のそれか、判るのが幾らもあるう、その入落を目にすれば、胸中波風立つであろう。そう思い巡らし、同情心湧くのであつた。二審になると、数ぐんと減り、緊張ほぐれ、進行流れるようにして、最終の結果に至る。それら、後から見返すと、善し悪しあつたのが、どれもこれも善く見える。何やら安堵であった。

だが、特選は、中に腑に落ちないのが混じる。

でもそれは個人の感じ方の違いに起因し、いつもある事、異とするに当たらない。大臣賞、都知事賞、会員賞は、当方の意に適うのに決まる。

善かつた。

瀧 悅三 (たき ていぞう)

一九三一年東京都

生まれ。



終わつて思うのは外部審査員の制度。文展初期は外部審査員が多くいたが、改革されて内部審査員だけに移行した。その経緯に照らすと、この制度、後退の印象が否めず、無理がある趣だ。いずれ遠くない将来廃されるのではないか。将來廃されるのて、現在、美術評論家、美じょん新報主筆。

(第五科書 外部審査員) 島 谷 弘 幸

毎年の日展は、出品者だけでなく美術を愛好する人にとっては大きな関心事である。今年の第五科も、全国から古典を基盤としながらも創意工夫を凝らした多様な作品八、六八二点が出品された。ここ三年微増しており、日展の改革が浸透している成果であろう。

しかし、周知のように、第五科は極めて狭き門で、限られた展示スペースに許されるのは一、〇六六点。入落の境は紙一重で、一審から良い作品を見逃すことの無い様に丁寧に審査を進め、気持ちは外部も内部もなく最終選考まで共同して選出することに専念した。審査は、苦渋の選択に終始し、結果として入選は東京の一二九点を筆頭に兵庫、京都、埼玉、大阪、愛知と続く。必ずしも人口と比例しないのは、地域の書に対する指導者の熱意や意識の違いと思われる。今後もさらなる普及に務め、良い作品を出品してもらいたい。

ところで、書は造形と線が命である。線は個人のセンスがものをいい、短期間で身に付けることは出来ない。一方の造形は名筆を手習い、眼習いすることで、日々に上達が見込まれる。加えて、他分野でも同様であろうが全体の調和が大切なのが書の世界である。ほかにも、筆さて、出品作家は、自らの美意識のもとに一心不乱に書作に向かうと全体が見えなくなることもある。ここでのアドバイスで、作品は一変することもあり、助言の役割は極めて大きい。いま日展は審査員が発表されると、当該の人は弟子も他の人の作品は見てはいけない。これはより良い作品を目指す日展にとってはマイナスであろう。いま、外部を招いての審査に情実はない。これはより良い方策を考える必要がある。



島谷弘幸（しまなに ひろゆき）

一九五三年岡山
県生まれ。

東京教育大学
(現・筑波大学)

教育学部芸術学
科書専攻卒業。

学芸部美術課書
科書専攻卒業。

（現・筑波大学）
教育学部芸術学
科書専攻卒業。

（現・筑波大学）
教育学部芸術学
科書専攻卒業。

二



『わくわくワークショップ』の様子



特別講演会
裏千家15代・前家元
千 玄室氏



『らくらく鑑賞会』の様子

改組新 第6回日展イベントレポート

※今年もたくさんの方が参加して下さいました。この様子はHPでご覧いただけます。

『講演会・シンポジウム・映像による作品解説等』
『ミニ解説会』
『らくらく鑑賞会』

『グルーブ解説』
『わくわくワークショップ』
『わくわくワークショップ』

十八年目を迎えた『わくわくワークショップ』。

会期中、日曜日の三日間、午前午後の全六回で、参加人数は一一七組二九九名。夏の『Oneday Art』と併せて参加する方も多く見られました。会場での鑑賞と本物の素材体験。各部門の特徴を踏まえたプログラムで、参加者は短時間ながら充実した時間を過ごせたようです。好きな作品を選んで、質問や感想を記入する鑑賞カードは、作家と若い鑑賞者をつなぐ役割を果たしました。今後も「日展だからできる」普及事業を展開してまいります。

〔教材等協力〕
（株）色彩堂、（株）榮豊斎、（株）オリオン、（株）吉祥、
（株）玉蘭堂、（株）クサカベ、（株）吳竹、
（株）ケーワス、（株）光雲堂、（株）ターナー
（株）平助筆復古堂、（株）ターレンスジャパン、
（株）ベイン工業、（株）松田油絵具、（株）墨運堂、（株）ホル
ミユーズ、（株）ヤマト、（株）ヤマトロジ、（株）
ステイクス

改組新 第6回日展 入場者数 (国立新美術館)

月 日	曜日	天 候	入場者数(人)	月 日	曜日	天 候	入場者数(人)	月 日	曜日	天 候	入場者数(人)
10/31	木	晴	3,909	11/ 9	土	晴	3,572	11/18	月	曇のち晴	4,947
11/ 1	金	晴	5,829	11/10	日	晴	3,612	11/19	火		休館日
11/ 2	土	晴	3,495	11/11	月	曇	3,240	11/20	水	晴	5,316
11/ 3	日・祝	曇	3,815	11/12	火		休館日	11/21	木	晴	5,277
11/ 4	月・振休	晴	3,316	11/13	水	曇	4,137	11/22	金	雨	4,567
11/ 5	火		休館日	11/14	木	曇のち晴	4,057	11/23	土・祝	雨	6,715
11/ 6	水	晴	2,652	11/15	金	晴	10,360	11/24	日	雨のち曇	7,118
11/ 7	木	晴	2,555	11/16	土	晴	5,447				入場者数103,722名 (平均4,715名)
11/ 8	金	晴	3,411	11/17	日	晴	6,375				※10/31は出陳者内覧会

改組新 第6回日展 応募点数及び陳列点数 (新入選数は入選数に含む)

	日本画	洋 画	彫 刻	工芸美術	書	合 計
応募点数 (前年度比)	393 (-44)	1,677 (-74)	108 (-11)	648 (-60)	8,682 (+139)	11,508 (-50)
入選点数 (新入選数)	169 (23)	528 (64)	85 (11)	423 (32)	1,066 (195)	2,271 (325)
無鑑査点数	140	125	158	128	145	696
陳列点数	309	653	243	551	1,211	2,967

改組新 第6回日展巡回展(予定)

会期は変更することがあります

開催順	開催地	会 期	会 場	開 催 者
	東 京	2019年11月1日～11月24日	国 立 新 美 術 館	公益社団法人 日 展
1	京 都	12月14日～2020年1月11日	京 都 市 美 術 館 別 館 みやこめっせ・日図デザイン博物館	日展京都展実行委員会
2	名古屋	2020年1月29日～2月16日	愛 知 県 美 術 館 ギ ャ ラ リ ー	中 日 新 聞 社
3	大 阪	2月22日～3月22日	大 阪 市 立 美 術 館	日展大阪展実行委員会
4	安曇野	4月25日～5月17日	安 曇 野 市 豊 科 近 代 美 術 館	安曇野市豊科近代美術館 公益財団法人安曇野文化財団
5	金 沢	5月23日～6月14日	石 川 県 立 美 術 館	北 國 新 聞 社
6	長 崎	6月21日～7月20日	長 崎 県 美 術 館	日展長崎展実行委員会

大臣賞受賞作品制作意図

東京都知事賞受賞作品制作意図

日展会員賞受賞作品制作意図

内閣総理大臣賞

第一科（日本画）

山下 保子「追憶」



過ぎた頃への回想の絵です。

若い頃は情熱的に過ごし、多くを感じ取つて日々を過ごしたものでした。画面の花々は、その頃の象徴として描き、人物は若い頃の形と、後に追憶する人の想いを同時に表現したいたいと思いました。

東京都知事賞

第一科（日本画）

中村 徹「海想」



海に棲む生き物が好きです。泳ぐ姿に機能美があり見ていて飽きない。きれいな模様の衣装をつけて、優雅に舞う姿は、まるで貴婦人のようだ。

一人の少女を配して、この魅力的な魚達を描きました。水槽から大海へ解き放すように、画面いっぱいに、泳がせてみました。

日展会員賞 第一科（日本画）

諸星 美喜「おいで」



写生を重ねても、まだ足らなくて。ヤマアラシの抜けた鬱が欲しくなった私は、飼育員さんに声をかけた。

許されることではないが、それを握った瞬間、盗んで逃げたかった。強くて硬い鬱を広げた時、「追風」を受けて少し前へ進む姿を、心のままに描いた。

内閣総理大臣賞

第二科（洋画）

斎藤 秀夫「清新」



長年に亘つて人物像を描いているが、最近若い綺麗な女性の表面的な美しさよりもモデルの内面的なものを描きたいと思うようになった。

色と色の響き合いの美しさは人間を幸せに出来ると信じている。心がやすらぎ、幸せな気持ちになるような絵を描きたいと思う。

東京都知事賞

第二科（洋画）

長谷川 伸「港の朝・曇る日」



南イタリアの港。小さな漁船が停泊する一隅。夜仕掛け、朝掛つた獲物を取りに行きます。家を継いだ若い漁夫もいて、仕事を終えると素敵な車で帰つて行きます。引き継がれるものと変化する様式。風景にそつと入れたテーマの為、車の配置、構成に苦労しました。

日展会員賞 第二科（洋画）

平野 行雄「粟国島の民家」



沖縄の離島、粟国島は沖縄の原風景が残つておらず、アダンやバショウなどの亜熱帯の植物や赤瓦の民家、漆喰やサンゴの白砂等々、夏の陽射しを受けて一段と美しさを増し、輝いています。これらの色彩に惹かれ、画面で美しいハーモニーを奏でるよう、そして、感動が表現できればと思いつつ制作しました。

文部科学大臣賞

第三科（彫刻） 勝野 真言「瀬」



身体の量と手足の流れに惹かれ、対象そのもののかたちを尊重しながら人体を追求した。各部を全体がどのように関わり合い釣り合いを取っているのか。土を使って果てしなく探る仕事であるが、この調和を求める探索は、奥深い山間に入つて行くようで面白い。

文部科学大臣賞

第四科（工芸美術） 井隼 慶人「積日惜夏」



日毎に陽の力が弱まる秋、盛夏に繁茂した水辺の植生（ポンテデーリア）が枯れゆき、葉、茎、花茎に様々な変化が生じる。その模様や形態がおもしろく、時と共に移り行く命を表したくて思つた。布の平面性と化粧料の鮮明な色彩を活かすモチーフの模様化に心掛け、発想イメージが持つ多次元性をいかに平面化するかが課題です。

東京都知事賞

第三科（彫刻） 齋藤 尤鶴「あおあらし」



私の住んでいる所は富山県の庄川という大きな川の側にあり、青葉をわたる爽やかな風（あおあらし）に生まれながらにひたっています。大木の中へ、その意を表現し、時間をかけて彫り出したのが、この作品です。

東京都知事賞

第四科（工芸美術） 大橋 年雄



Mesa Marley「神光天地照」
Light of a god lights up a universe

アメリカ・アリゾナを旅した。そこはメサと言われる台地や浸食された岩山が連なり、地球とは思えない景色だつた。そして先住民族との出会いからネイティブな陶芸技術を学んだ。そこで見た絶壁と断崖からの深い裂け目を土で再現する行為は、私がこれまで学んできた技術を超えて、地塊が隆起する。地塊が隆起する。地塊が隆起する。

日展会員賞

第三科（彫刻） 中原 篤徳「ささやかな」日終わりに」



明るさの中の暗さ、優しさの中の瑞々しさといったものを、形にしたいと思いながら制作を続けた。観念と人体の実在を行き来しながら、素直さを見失わぬよう心掛けた。自分の目標は彫刻が那辺にあるのか、ささやかな光が見えたように思つていい。

日展会員賞

第四科（工芸美術） 村田 好謙「風と光と水と」



天空から降り注ぐ光と水、蜘蛛の巣に止まり宝石の様に美しく輝く。風にゆらぎはかなくも美しく散りゆく花びら。何気なく出逢う自然から煌めく生命の尊さを感じ、慈しみ、心が明るく澄んでいく祈りをテーマに制作致しました。

日展会員賞

第五科（書） 吉川 美恵子「梅」



正方形の紙面に西周金文體でこの詩を書くにあたり、造形的には大ぶりな自然石を組み上げた石垣をイメージした。文字の大小・疎密、余白などで自然さ自在さを重視しつつ、一貫した時間の流れの中でそれを定着させると、止揚が課題であつた。

迫力ある力強い線の大字かな作品と思い、制作に取り掛けるものの、書くほどにスケールが小さく線が固くなり伸びやかさが無くなる。九月中旬の早朝に書いた一枚が肩から力が抜け、自然体で筆が運べたように思われた。この作品が今回の出品作となりました。



石川県金沢市にある大野という港町の風景を描きました。私はこの地域から見る海の風景にとても魅力を感じていて、これまでにもそれを題材にした作品を制作してきました。今回は手前には大きく空き地を配置した構図で描いてみました。何もない空き地をどう描いていくかということには苦労しましたが、その表現を模索したり今までには無い発見があつたりと、楽しんで制作に取り組めたように思います。



（日本画）河井眞里枝
元々は熊本におりましたが、画材の豊富さや美術館の多様など環境面での魅力を感じ四年前に上京いたしました。慣れない土地で仕事をしつつ創作していくのは想像以上に大変でしたが、六回目の挑戦で日展に入選できましたことはとても嬉しく思います。自分の描き方を確立し自信を持つて描くことができましたのは、周りの方のアドバイスと夫の支えがあつたからだと思います。皆さまのご支援に報いるべく、来年は特選に値する作品を描きます！



（日本画）吉田松之助
普段から飼育しているクワガタ虫を観察する中で、彼らと自分に多くの共通点があり、そこに自分自身を投影することで見出せる新たな自分との出会いと、クワガタの幼虫が餌を食べた痕跡の造形に美しさ、その二つを表現したいと思って制作しています。特に幼虫が餌を食べた時に偶然できる形と、自分の仕事の中で偶然発見できる色や形が、どこかでリンクしているような印象もあり、作品を作る時のねらいにもなっています。



（洋画）宮崎幸子
若い頃からあこがれていた日展に初入選し大変うれしく思っています。高校の美術の教員をしながら制作をし、退職後はカルチャースクールで人物画を学び直しています。六年前の個展を機に「命の輝き」を生涯のテーマと決めました。今回の入選作は老人の深い表情がテーマですが、人生の終わりを目前にした人間が見せる最後の命の輝きを描いてみました。この度の入選を励みにさらに研鑽し制作していきたいと思います。



（洋画）富田多美子
初入選の反響の凄さに驚いています。さすが日展！入選したら提灯行列するからと冗談を言つたけれど：小品もたくさん描くよう恩師から勧められ、せつせと写生に出かけました。熊本では自然がいっぱい。風に吹かれて描く楽しさと連続。別では自然がいっぱい。特に早朝、夕暮れの美しさは、感動の連続。夢中で月あかりで描く努力の事も。せつせと写生に出かけました。風に吹かれて描く楽しさと連続。これからも良い絵を描く努力を忘れずに精進します。ご指導頂いた先生、支えてくれた皆様に感謝を捧げます。



（洋画）久保尚子
日頃より先生方から日展の長きに亘る伝統と歴史をお教え頂き、情報溢れる昨今においては今後一層確固とした基軸が必要となつて来るのではという思いと、斯様な存在としての榮えある日展に挑戦させて頂く事で改めて自身と制作を見つめ直したいという気持ちが膨らみ、この度初めて出品させて頂きました。今日に至る全てに感謝申し上げ精進して参る所存です。今後共厳しく御指導の程宜しくお願い申し上げます。



(彫刻) 示 崎 麻 紀

今回初めて等身大の人体をつくりました。制作の目的は造形力を身に付けることと、現実感のある生きているような像をつくることでした。制作中はクロッキーを繰り返し行い、対象をよく見てつくるという事を常に意識して制作しました。また塑造では等身大の重量を支えられる強度を持たせつつも、石膏取りがしやすい芯棒作りを意識しました。樹脂成型も等身大は初めてでしたので今回の作品は制作中の全てが勉強でした。

彫刻を作り続けて四十年、中学校教諭を退職し、今は美術の授業のみの非常勤講師となり、彫刻に時間を使つかりとれる第三の人生が始まりました。大作にも久々に取り組み、至福の思いです。これから「思いつきり好きな彫刻に納得いくまで取り組んでいくぞ」と言う熱い思いでモデルに自分を投影して制作しました。

憧れの日展にチャレンジしようと思える大作ができます。初出品初入選。一発花火にならないよう頑張ります。

(彫刻) 染 川 浩 美

彫刻を作り続けて四十年、中学校教諭を退職し、今は美術の授業のみの非常勤講師となり、彫刻に時間を使つかりとれる第三の人生が始まりました。大作にも久々に取り組み、至福の思いです。これから「思いつきり好きな彫刻に納得いくまで取り組んでいくぞ」と言う熱い思いでモデルに自分を投影して制作しました。

憧れの日展にチャレンジしようと思える大作ができます。初出品初入選。一発花火にならないよう頑張ります。



(工芸美術) 辻 拓 真

気が付けば、私の傍らには常に日展があります。家では父、祖父が日展へと作陶に励んでいて、町へ出れば、青木龍山先生をはじめ多くの先生の名を目にします。そんな日展の舞台は荘厳で美しかったことを今も記憶しています。

私の作品は、白磁の板造りと有田では珍しいですが、連綿と続く日展の息吹を感じて制作しています。この舞台に作品が並んだ喜びを忘れず、精進していきたいと思います。

六十三歳にして初めての日展応募でしたが、初入選の結果を頂くことができ大変嬉しく思つております。四年ぶりの制作で自信が持てないままの応募でしたが幸運でした。会場では、著名な先生をはじめ、諸先輩方の作品群に圧倒されるばかりでした。が、皆様からのご意見やご指導を励みとし、これから一層制作に取り組んでまいりたいと思つております。今後とも皆様のご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(工芸美術) 南 昌 伸

今回初めて出品し、歴史ある日展に入選させて頂きとても驚きました。

学生時代に蠟筆染めを始め、スケッチから染めの工程まで気持ちを緩めず、日々樂しみながら格闘しています。まだまだ未熟で今回の作品を見ても反省点が多く目につきました。

僥倖美しい自然や生き物の瞬刻を染めで表現するのは難しいです。でもそこも染色の面白さだと思つています。今回の入選を励みに、今後も立ち止まる事なく、より精進して行きたいと思います。



(書) 金子聖子

料紙に流れる仮名の美に惹かれて書を始め、日展を訪れる度、このような作品を書ける日がくるのかと励みとしてまいりました。特に大好きな帖作品は全て拝見しながら夢を描いておりました。そしてこの度の帖での入選は、感謝の気持ちと共に、それに恥じぬよう更に励まなければという決意をつみました。校訓の「敬愛、自主、力行」を今でも座右の銘としています。今後も書を敬愛し、自主的に学び、力行していくたいと思います。



(書) 金澤知香

この度は歴史あるあこがれの日展に初入選することが出来、喜びと重みを身にしみて感じています。漢字から仮名へ転向して十二年、仮名書の奥深さや線の難しさを日々痛感している中での入選で、恩師や仲間への感謝の気持ちで一杯です。

今回の作品は長年寝かせた古い紙と対話しながら紙に合う墨色、潤渴を意識して仕上げました。これからも初入選を一つの通過点として、立ち止まる事なくより精進していきたいと思っています。



(書) 小山蘇龍

この度、改組新第六回展において、入選しましたこと、心より光栄に思います。今回は、巻子に宋の蘇軾詩「丙子重九二首より一首」を行草で制作させていただきました。まだまだ満足のいかない点も多く、反省するばかりであります。最後になりますが、この度の入選を糧に今後もより一層、精進していく所存であります。最後になりますが、この度の入選に際し、ご指導いただきました。た師に、また支えてくれた両親に感謝しております。



(書) 山崎珠雪

詩文書の魅力は、何といつても自分の思いを言葉に乗せて表現できることです。美しい情景や深い思いをどのような書風で書くか試行錯誤します。文学的には格調高く美しい日本語で、書風は古典の香りが感じられる表現を、というのが目指すところです。日展に挑戦し続けて早三十年。評価して頂けたことは望外の喜びです。育てて下さった会と書友達には、ただ感謝あるのみ。今後も詩文書の魅力を伝えられる作品づくりを目指します。



(書) 三森春蘭

この度は歴史と伝統ある日展に初入選させていただき、喜びと感謝の気持ちで一杯です。

今回の出品作は、まだまだ未熟ながらも自分自身のありのままを表現することを念頭に、無心に制作に励みました。

師より「印を刻るだけの勉強ではなく、印外に印を求める気持ちを大切にし、書・画・詩にも精進するよう」と常々ご指導頂いております。今回の入選を機に更なる篆刻の世界を探究し、精進して参ります。



(書) 河田麗翔

張りつめた緊張の中、何が書けるのかと自問自答しながら書の中に沈んでいく。かけがえのない私の書の時間。紙に向かい、渴筆表現、行間の響き合いに試行錯誤。そして、自分の限界を越えていくことの連続の中で書き上げた一枚。

日展入選の朗報が届きました日は、夢ではないかと一睡も出来ず、朝陽が昇るのを見て、現実だと喜びが溢れました。この感動と喜びを忘れずに、書に真摯に取り組んで参ります。

日展ゆかりの 美術館 散策

第16回

全国各地の美術館の中から日展作家ゆかりの美術館を関係者の紹介文を添えて少しづつご案内いたします。是非、日展作家の名作との出会いをお楽しみください。

山口蓬春記念館

山口蓬春(1893~1971)
日本画家
日本芸術院会員
文化勲章受章 文化功労者
日展常務理事・顧問等を歴任



企画展を実施、来館者はシニア層の女性が多いが、各レベルに応じた日本画教室を開催している他、小学生や中学生を対象に無料の美術に親しむ教室なども行われている。一九〇〇点の収蔵品を持つ記念館です。皆さんは是非訪れていただきたいと思います。



『緑庭』(昭和二年第八回帝展出品作)

構成、一九六五年文化勲章を受章し晩年には、集大成とも云える皇居新宮殿に戸絵「楓」を完成、数々の業績を残し一九七一年五月七七歳の生涯を閉じた。

この山口蓬春が戦後一三年間を過ごしたこの葉山の邸宅と先生の作品、素描、模写に、収集していた美術品等散失を防ぐべく



JR東海須田寛社長(現相談役)は蓬春を後世に伝えるべく、JR東海生涯学習財団を設立、この記念館が開館された。この建物も蓬春の学友で近代数寄屋建築の創始者吉田五十八が増改築を行い、大江匡の設計によって記念館へと改修され二人の名建築家の感性が融合し、モダンな佇まいを造り出し、若き建築家も勉強に訪れると聞く、二階の旧画室や別館二階からは天気の良い時は大島まで見渡せる。六百坪の庭園は七十種類の四季折々の花々木々が植えられており、散策路から堪能できるようになっている。館内では、上野動物園で飼育されている可憐な白熊の姿を描いた「望郷」の小下図を常設で展示しているほか、テーマを決めて

事にただただうれしく感動したものです。絵で生きることが決まった出発の思い出にこの先生があります。

JR逗子駅からバスで二〇分。葉山の一色海岸を臨む山の中腹に山口蓬春記念館があります。大正、昭和の画壇で新しい日本画の創造、西歐的モダニズムを加え理知的な画風を

『南島薄暮』(昭和十五年紀元二千六百年奉祝展出品作)



山口蓬春記念館

〒240-0111

神奈川県三浦郡葉山町一色2320 TEL 046(875)6096

【アクセス】

JR逗子駅から京浜急行バス3番乗り場、京浜急行新逗子駅から南口2番乗り場より、「海岸回り葉山行(逗12)」、「海岸回り福祉文化会館行(逗11)」に乗車 バス約20分
「三ヶ丘・神奈川県立近代美術館前」下車 徒歩2分

教えて、作家さん! — お便りコーナー —

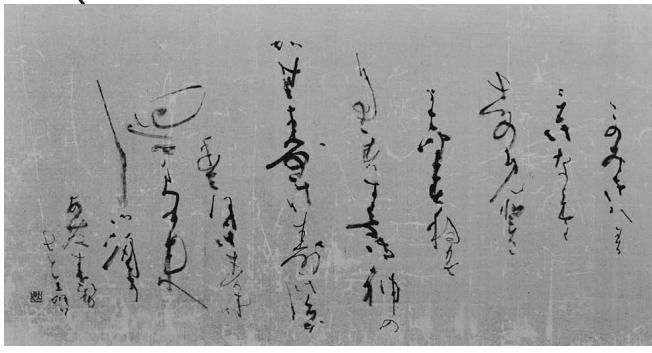
わくわくワークショップより

赤い紙に文字がかかれていて字がくっきりと見えてきれいでした。
なぜ作品の紙を赤色の紙にしたのかおしえてください。また色がうすいところがありますが、どうやってうすいところをつくったのですか。こなみたいなのはきんぱくですか。

爽志くん 13歳

赤（オレンジ色）に見えた紙は、100年くらい前の中国で作られた絹の布です。オレンジ色の布は濃く擦った墨とよく調和して美しくすっきりと見えると思いました。薄く見える部分は長い年月の間に色があせたものです。粉のように見えるものは金の粉で、作られたときはもっとたくさんあったものが、時間がたつて剥がれたのだと思います。昔は色のついた美しい紙に書かれたかな作品は、たくさんありました。

井茂圭洞



御酒

絵いっぱいの梅と、はしに寺があって、京都という感じがでてきて、なんとも言えないふしぎな気持ちになりました。
梅が赤色と白色にわけてあって、つぼみも本物のようでした。

周くん 9歳

ふつうの絵のぐで描いたのではなく、じつはこの絵はうるしの木からさいしゅうした漆の液をもとに、その中へいろいろな色の顔料を入れてよく練って作った『いろいろうるし』でかいています。いろいろむずかしい技術でやりますが、たとえば白い梅の花は卵の白い殻をつぶしながら一つ一つと花の形になっています。そのほかにも美しい貝のキラキラをはって使ったり、金ぱくをはったり、うるしのほかにもいろいろな材料を使います。天皇が代わられて平成から令和になりましたが、その令和の文字の意味のもとになった話が、この絵のもとになっています。先生か、お父さんか、お母さんに聞いてみて下さい。ていねいに見てくつれてありがとうございました。

伊藤裕司



梅開上苑

かめの顔とこうらがとてもリアルで、
はくりょくがありました。あと、魚が
いるところもかわいかったです。
わたしは、絵がそんな上手ではないけ
れど、この絵を見て色の使い方をもつ
と学びたいと思いました。

胡美ちゃん 10歳

この絵は夢の中で見た亀です。夢の中の色は現実の色では
なく私だけの思いの色です。絵は好きな色だけで描けるの
が魅力です。亀がリアルではくりょくがあると書いてくれ
ましたが、そのように描きたかったのです。「海の哲人」
としたのも我々人間と同じく亀を魅力的にしたかったから
です。君だけの色で思いやその気持ちを表現できるとい
うですね。絵は糸が会うと書きますが、いろんな色の糸が織
りなし、気持ちを描くのは色だよということです。

土屋禮一



海の哲人

こうようがきれいでした。いろをかさね
ていて、ふかいいいろになっていました。

敦士くん 6歳

八ヶ岳南麓に小屋を建てアトリエにして43年がたちます。
日本の美しい四季を描くことを目的にしていますが温暖化
と西国からの黄砂と汚染された空気による山の砂漠化を心
配しています。晩秋の山麓は空気が透明で赤い色のみが残り
ます。風に耐え、太陽を求めて懸命に枝をのばす木に、若い
人と重なり、応援して美しく生長するよう願っています。

寺坂公雄

山峡の彩り

ウサギとカメがいっしょにくらして
かわいいです。
もっと作ってください。ぼくもほし
くなりました。

悠貴くん 8歳

「ウサギとカメがいっしょにくらしてかわいいです。」と
感想を頂きました。本当にありがとうございます。観る
人に楽しんでもらえる事と、かわいいと思ってもらえる
ように制作しました。そこを分かってもらえて嬉しかっ
たです。会場でお会いできて良かったです。「ほしくな
りました。」と感想ありがとうございます。来年も日
展を観に来て下さいね。

鈴木紹陶武



カメの動く家

●個人

東晋一郎様 新井演子様
飯田真未様 飯塚勝己様
池田康子様 石坂喜子様
石崎國夫様 井谷善恵様
井上道守様 今田功一様
岩田薰様 岩田朝子様
梅下一弘様 岩村忠司様
岡昌志様 岩村朝子様
奥田卓三様 大谷眞治様
梶山純子様 奥田節子様
河合昭様 角井博様
栗原直子様 金子美和様
児玉安司様 木下隆介様
坂本美賀子様 吳祐輔様
佐久間基晴様 近藤禎男様
高木京子様 佐川かおる様
高木寛史様 副島隆様
高田久信様 高木千春様
高柳とよ子様 田頭益美様
高木京子様 鶴巻百合子様
高木寛史様 高橋千笑様
高木寛史様 竹本大鶴様
田中宏典様 土橋正彦様
土屋礼央様 中原友三様
中田由佳様 中田俊通様
中室里恵様 西田俊通様
西村潤帰様 西村友子様
野田裕一様 藤田瑞子様
森嶺順子様 藤田理恵子様
真下清美様 松岡庸子様
松本正之様 宮負丁香様
宮島幸男様 吉村はるか様
吉村はるか様

●法人・団体

株式会社 IDホールディングス様
株式会社 一休園様
有限会社 一恕様
医療法人社団 永寿会様
株式会社 大垣共立銀行様
株式会社 加賀屋様
株式会社 鹿島建設様
株式会社 川端商会様
株式会社 玉蘭堂様
謙慎書道会様
ゴールデン文具株式会社様
株式会社 光雲堂様
株式会社 佐久間太肥堂様
有限会社 三洋様
出釋迦寺様
滴仙会様
株式会社 高山草月堂様
株式会社 筑波銀行様
T&Tパートナーズ法律事務所様
株式会社 テレビ長崎様
株式会社 東洋額装株式会社様
株式会社 公益社団法人日本書芸院様
有限会社 跋涉堂様
福井素鳳堂様
公益財団法人 古川知足会様
株式会社 便利堂様
株式会社 丸栄堂様
有限会社 みなせ筆本舗様
一般財団法人 桃園学園様
株式会社 谷中田美術様
株式会社 湯山春峰堂様
菱三印刷株式会社様
株式会社 リンクス様
株式会社 和光様
佐伯華水先生(書・会員) 2.1.20.26

叙勲

令和元年二月

中山忠彦(日展理事)
森野泰明(日展顧問)

旭日双光章

一色白泉(日展会員)

右上	表紙 内閣総理大臣賞
右下	斎藤秀夫「清新」
中下	文部科学大臣賞
左上	勝野眞言「瀬」
左下	牛窪悟十「岑參詩」 内閣総理大臣賞
	山下保子「追憶」 文部科学大臣賞
	井隼慶人「積日惜夏」

左の先生方が逝去されました。
謹んで哀悼の意を表します。

編集委員 川田恭子 水野収
桑原富一 平野行雄
清家富一 平野行雄
相武悟 堤直美
中村常雄 月岡裕二
伸夫常雄 月岡裕二
西村常雄 月岡裕二
東軒常雄 月岡裕二
(清家)

日展ニュースが年三回の発行になつて一年が経ちます。今号は、座談会から始まり、外部審査員の寄稿、各受賞者の作品解説、初入選者の新鮮な声等々、盛り沢山の記事でお届け致します。

編集後記